

伊藤礼氏の肖像

父のこと・先生のこと

小さいときには自分の親はなんで周りの友達のお父さんのように「お医者さん」「サラリーマン」といった一つの仕事だけじゃないんだろう。とよく思ったものでした。文筆作業と大学教師の2足の草鞋の比重がどのようなものなのかわからず、そんなに無理して仕事しなくてもいいのになどと思ったものでした。

伊藤礼氏長女・伊藤礼子さん

父は色々な事に興味がある人でした。その為、様々な事を伝授されました。例えば、日曜大工。子供の時にミニカーで遊んでいると、そのミニカー用の車庫作りを教え込まれました。自分はそんな事はどうでもよかった、ミニカーを動かして遊んでいたが逆らえなかった。当時は幼稚園生でしたが木を切り、釘を打ち、蝶番をつけて開閉する扉まで付けた覚えがあります。もちろんその時に私はトンカチとノコギリの使い方を覚えました。

伊藤礼氏長男・伊藤晃さん

僕らの速度が落ちたのではない。礼先生が速度を上げたのだ。礼先生は容赦のない人である。久我山の自宅から駅に向かう坂を降り切った交差点のところで追いついた。僕はほっとした。礼先生が速度を上げたのではなく、坂の傾斜で速度が上がったことが分かったからである。「コウシュウカイドウで行こう」横に並んだ僕に向かって礼先生が囁いた。コウシュウカイドウとは何ぞや？疑問を発する間もなく、僕の同意も無いままに、礼先生は激しい往來の車道の流れに飛び込んだ。正気かよ、と思ったが、遅れるわけにはいかない。見失っては断じてならぬ。僕は意を決してえいやっと車道に飛び込んだ。

伊藤礼氏教え子・田村高行さん「周辺」より

「疲れましたね」という話をしていたら、先生が自転車で走行中に心臓が止まった時の話をしてくださった。「三途の川を渡ったら本当にきれいなお花畑があるらしいよ」と何気なく口にされた。「そこでは懐かしい人達が迎えてくれているそうだよ」ともおっしゃった。「死後の世界はあるのかなあ？」と尋ねてくるので、私は不思議でもなんでもないので「先生、ありますよ」と答えた。

伊藤礼氏教え子・吉永正光さん「カンナ」より

彼はいつでも機嫌の良い声を出すことができた。

どこからその声が出てくるのか自分でも不思議だった。

伊藤礼「犬のいる風景」より

そもそも「面白い」というのはどういう事だ。お客が帰った後、私は辞書を引いてみた。某国語辞典である。これには「面白い」というのに次のような説明があった。

「①何かに心が引かれ、続けて（進んで）してみたり、見たり聞いたりしたい様子だ。

②普通とは変わった所が有り、続けて（進んで）味わったりつきあったりして、もつと内容突き止めたい感じた。

③おかしい事やうれしい事が有って、笑いが止まらない状態だ」

右のうち③はともかく、①と②はたしかに私が自転車に乗っているときの心情に合致していた。

伊藤礼「自転車」より

自転車ぎんぎん、人生の道のり

伊藤礼 追悼展

ユーモアと哲学を乗せて。

伊藤礼氏は英文学者、エッセイスト、翻訳家であり、作家・伊藤整次男です。エッセイ集に『狸ビール』『伊藤整氏奮闘の生涯』『まちがいつづき』『ハチリの人』『ごくごく自転車』『耕せど耕せど』などがあります。若いころからの数々の大病を乗り越えての老年期、自在な楽しみと闊達愉快な筆の運びは、世代を超えた読者の賛嘆と共感を呼びました。『伊藤整日記』全8巻の刊行を最期の仕事として、2023年9月22日90年の生涯を閉じられました。本展は、鋭い観察眼と膨大な知識、留まるところのない好奇心で多くの読者を引きつけ、文筆と同様融通無碍のふるまいと機知に富んだ会話で人々を魅了した作家・伊藤礼氏の90年の生涯と魅力を、著作と遺品、そして人々の証言によって、ゆかりある小樽の地で紹介するものです。



1981年（48歳）市立小樽文学館にて川崎昇氏と



1991年（58歳）第6回日本文化界団基代表団訪中時



1993年（60歳）中国・長江三峡下り



2003年（70歳）信楽にて

私にはうまく型を踏むということができなかった。私はかぼそい糸を太い綱にしようとしていた。そうしてつかれはてていた。「ふつうにしている」と父は言ったが、そうやってつかれはてるのが私の「ふつう」だった。

伊藤礼「かぼそい糸」より



絵・玉川ノ

2025年9月13日(土)～12月7日(日)

市立小樽文学館

主催・会場：市立小樽文学館 〒047-0031 小樽市色内 1-9-5 tel.0134-32-2388

休 館 日：毎週月曜日（9/15、10/13、11/3、11/24 を除く）

9月16日（火）、17日（水）、24日（水）、10月14日（火）、15日（水）、
11月4日（火）、5日（水）、25日（火）、26日（水）

開館時間：9時30分～17時（最終入館16時30分）

観 覧 料：一般300（240）円、高校生・市内高齢者150（120）円、
中学生以下・障害者無料 （ ）内は20名以上の団体料金

後 援：小樽文学舎



文学館公式Xで最新情報を

JR函館本線		小樽駅
●小樽経済センター		
●産業会館	長崎屋	●サンビルスクエア
都通り		
●オーセントホテル小樽		
旧手宮線		
金融資料館 (旧日本銀行)	●市立小樽文学館	
	●郵便局本局	
	●小樽芸術村	
小樽運河		